『性と生殖の人権問題資料集成　編集復刻版』

不二出版　2000年６月　全35巻＋別冊

最近わが国でも性と生殖をめぐる人権を取り巻く様々な問題に対する関心が高まっているが，とりわけ「1.57ショック」(1990年）をきっかけとして「少子化対策」論議が盛んになったことと，カイロ会議（1994年）を機に「リプロダクティブ・ヘルス／ライツ」(性と生殖に関する健康／権利）という考え方がわが国に入ってきたことがそのような関心の高まりの２大源泉といわれる．それでは，それ以前の日本には性と生殖に関する人権問題は存在しなかったのだろうかという疑問がわくが，全35巻からなる本資料集成は戦前期の日本にあっても性と生殖をめぐる様々な激しい動きがあったという問題意識に立ち，当時の資料の復刻によってその歴史をたどろうとするものである．本書があえて表題に「リプロダクティブ・ライツ」の語を用いないのは，この語が生まれるはるか以前の時代を当時の資料によって忠実に再現すること，つまり資料をして語らしめることを本義としているからであろう．

「性と生殖」の近代史といっても人によって関心のありようは異なるだろうが，本資料集成は「産児調節運動」(第１～14巻),「優生問題・人口政策」(第15～26巻),「性科学・性教育」(第27～35巻）という３つの主題を立て，1875（明治８）年から1953（昭和28）年までを対象期間とし，収集は書籍・研究資料・雑誌・新聞記事のほか，公文書・パンフレット・リーフレット・調査票・チラシにまでおよんでおり，全499点からなっている．この期間はわが国において産児調節運動・優生問題・性科学などが出現した時期を含み，優生保護法の形の定まった年であり，日本家族計画連盟創立の前年にあたる1953年を区切りとしている．具体的な動きを伝える調査結果・事務文書・チラシ類など，失われやすく今では目にする事が困難な資料も収録され貴重である．余談だが，収録資料中40数点，旧人口問題研究所の資料が含まれている．この復刻版をとおし再度研究に活用されればうれしいことである．

本資料集成は現時点でまだ全巻配本に至っていないが（最終配本は2003年２月の予定)，初回配本に添付された別冊（分売可）は150ページ弱の小冊子ながら，全体の「解説・総目次・索引」が掲載されており内容が充実している．このうち「解説」は３編にわけられ，本資料集成における３つの主題各々の編者すなわち荻野美穂（産児調節運動編)，松原洋子（優生問題・人口政策編)，斉藤光（性科学・性教育編）が執筆している．３つの「解説」は「性と生殖の人権問題」について，それぞれの観点からの通史・概説書となっていて，この間の歴史的な流れや，行政から学界・民間にいたるまでの社会的な状況や動きが，読みやすい分量にまとめられている．本体にあたる資料集成の資料は概説の参照文献や引用文献として参照する形をとっている．概説書として読みつつ，参照文献をすぐに実際に目にすることのできるメリットは大きい．なお，この解説部分は第１巻（産児調節運動編)，第15巻（優生・人口政策編)，第27巻（性科学・性教育編）の巻頭にも収載されている．　　（白石紀子）